

論文の要旨

論文題目	現代日本語における複合語の意味形成 —構文理論によるアプローチ—
氏名	野田 大志
学位	博士 (文学)
授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日

本研究は、[動詞連用形+動詞基本形]型複合動詞（「殴り倒す」「降り始める」など）、[普通名詞+他動詞連用形]型複合名詞（「花見」「鉛筆削り」など）、[他動詞連用形+具体名詞]（「焼き魚」「打ち水」など）という現代日本語における3つのタイプの複合語を考察対象とし、これらの複合語の意味形成を認知言語学における構文理論 (construction grammar) の枠組みに依拠して共時的に分析した。

従来複合語の研究は様々な理論的枠組みのもとで、精力的に研究がなされてきている。しかし、いずれの研究においても、トップダウン的、要素還元主義的なアプローチが採られている。

これに対し、本研究では、構文理論のボトムアップ的、ゲシュタルト的なアプローチを採ることにより、複合語の意味形成の過程を、人間の事象認知の実態に即した形で分析し、記述した。また、個々の分析を通して、従来詳細に扱われてこなかった構文理論の枠組みにおける複合語研究の方法論を検討した。すなわち、本研究は、複合語研究及び構文理論における、記述的貢献を目指したものである。

以上の点を踏まえ第2章では、まず構文理論における「構文」の位置づけを確認した上で、構文を「意味と形式との結び付きが慣習化したゲシュタルト的な複合体」と定義付けた。そして、現代日本語の複合語を構文と位置づけることで、複合語の意味形成を包括的、体系的に分析できるという可能性について提案した。

次に、様々な研究者によって共有されている構文理論の理論的特徴として、以下の3点を提示した。

- ① 文法体系も語彙 (レキシコン) と同様に、意味と形式のペアとしての記号であり、語彙的知識と文法的 (統語的) 知識は連続的なものである。
- ② 構成要素の意味は構文 (複合表現) の意味を動機づけるものの、構文 (複合表現) 全体の意味は構成要素に還元して捉えられるものではない。
- ③ 構文は典型事例から拡張事例までの幅を有するカテゴリーであり、構文的意味同士及び関連する構文同士がネットワーク的に連携している。

本研究もこの3点に基づいて具体的な分析を行ったものである。

次に、構文理論の枠組みにおいて現代日本語の複合語を分析していくアプローチの諸側面（複合語における構文的意味拡張、構文的多義ネットワーク形成など）について検討した。

続いて、本研究において援用する認知言語学の諸概念（概念化、百科事典的意味、フレームなど）について確認した。

第3章から第5章までは、個別的な分析である。

いずれの章においても、最初に個々の複合語の意味について百科事典的意味観に基づいて詳細な検討を行い、そこからボトムアップ的に現代日本語において確立していると考えられる複数の構文的意味を抽出した。そして、その複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークを提示することで、複数の構文的意味の連続性及びそれぞれの複合語の意味形成の全体像を詳細に記述した。

構文的多義ネットワークの形成に関しては基本的に、主体の言語使用や言語習得の過程に関わるボトムアップ的なアプローチである、Langacker (2000) の「動的使用依拠モデル」(dynamic usage-based model) の考え方に従った。すなわち、複合語の意味形成を、実際の言語使用に基づいてボトムアップ的に形成されていくネットワークとして捉えるもので、相互に類似性を有する複数の具現事例（本研究においては、個々の複合語）から意味的共通性としての構文的意味が抽出され、それが定着することで更に新たな具現事例（個々の複合語）が認可される、と考えた。また、構文的意味に適合しない事例（個々の複合語）が出現した際には、構文的意味が動的な拡張のプロセスを介して新しい事例を提示する、と考えた。

また、構文的多義ネットワークを構成する節点が複数の構文的意味であり、それらの節点同士を結ぶリンクがメタファー、シネクドキー、メトニミーの3種の比喩による拡張のリンクであると位置づけた。すなわち、認知言語学における言語表現の多義性に関する先行研究を踏まえ、意味拡張の動機づけとしてのメタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩に基づく意味ネットワークが、言語表現の多義の実相を適切かつ詳細に捉えられるモデルであるという考え方を複合語レベルの構文的な多義性に適用した。

なお、Langacker の考え方に基づき、第3章から第5章までにおいて検討する複合動詞及び複合名詞はいずれも、現代日本語における（2つの形態素による単一の合成によって形成される）最小構文(minimal construction)の事例であると位置づけた。

さて、第3章では、「殴り倒す」、「降り始める」などの[動詞連用形+動詞基本形]型複合動詞を考察対象とした。まず、個々の複合動詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計13の構文的意味を抽出し、さらにそれらの構文的意味間の相互関係を、比喩による拡張という観点から分析した。

また、13の構文的意味（ネットワークにおける節点）によって形成される構文的多義ネットワークを提示し、このネットワークにおける Langacker が提案している主体化

(subjectification)、及び Traugott が提案している主観化(subjectification)の関与について検討した。

なお、この章では、従来の先行研究を批判的に検討しつつ、より詳細な複合動詞の意味的な分類を提示し、また従来詳細に検討がなされてこなかった語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性についても主体化及び文法化という観点に基づき記述した。

次に、第4章では、「花見」、「鉛筆削り」などの[普通名詞+他動詞連用形]型複合名詞を考察対象とした。

まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計11の構文的意思を抽出した。次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩、及び構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩という、2つのレベルの比喩の関与について検討した。なお、後者のレベルの比喩に関しては、「花見」などにおける〈行為〉、「金持ち」などにおける〈人間の性質〉、「鉛筆削り」などにおける〈道具〉などの複数の構文的意思の相互関係を、〈行為〉に関するフレーム内での概念的関連性に基づく拡張であると捉えることで包括的に分析できるということを提示した。

また、11の構文的意思の上位カテゴリーである3つのカテゴリーの意味的性質の相違点（「花見」などの動詞的な複合名詞カテゴリー・「金持ち」などの形容詞的な複合名詞カテゴリー・「鉛筆削り」などの最も名詞らしい複合名詞カテゴリー）及びその連続性と、現代日本語の品詞構造における（動詞・形容詞・名詞の）性質の相違点及びその連続性との相関関係について検討した。

次に、第5章では、「焼き魚」、「打ち水」などの[他動詞連用形+具体名詞]型複合名詞を考察対象とした。

まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計7の構文的意思を抽出した。

次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩、及び構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩という、2つのレベルの比喩の関与について検討した。また、後者のレベルの比喩の関与について、「焼き魚」、「飲み物」などの、行為主体による何らかの行為が関与する存在物を表す構文的意思から、「打ち水」、「買い物」などの、何らかの行為を表す構文的意思へのメトニミーに基づく拡張を、さらに一般的に、「図地反転」という認知能力が反映している言語現象であると位置付けることができることを提案した。

最後に、第6章では、本研究のまとめと今後の検討課題を提示した。